

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Validation of the Degree of Decontextualisation in Rhetorical Unit Analysis

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅原, 正幸, 田中, 弥生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001507

修辞ユニット分析における脱文脈化指数の妥当性の検証

浅原 正幸 (国立国語研究所コーパス開発センター) *

田中 弥生 (東京大学大学院総合文化研究科)

Validation of the Degree of Decontextualisation in Rhetorical Unit Analysis

Masayuki Asahara (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

Yayoi Tanaka (University of Tokyo)

要旨

本稿では修辞ユニット分析における脱文脈化指数の妥当性について検証する。修辞ユニット分析は、節に相当するメッセージが命題か提言か（発話機能）・空間上どこにあるか（中核要素）・時間軸上どこにあるか（現象定位）を認定して、その組み合わせに基づき「修辞機能」と「脱文脈化指数」を同定するものである。順序尺度である脱文脈化指数は経験的に決められたものではなく恣意的なものであった。この脱文脈化指数が一般にどの程度共有されるものなのかを確認するために、Yahoo! クラウドソーシングを用いた一対比較による被験者実験を行った。一対比較のデータを Bradley Terry 法に基づく一般化線形モデル、線形順序に変換し、脱文脈化指数の妥当性を検証した。結果、おおよそ脱文脈化指数の順序は共有される一方、中核要素や現象定位に対する日本語話者の見方を必ずしも反映していないということがわかった。

1. はじめに

本稿では修辞ユニット分析 (Rhetorical Unit Analysis: RUA) における脱文脈化指数の妥当性について検証する。修辞ユニット分析は選択体系機能言語理論の談話分析手法の一つ Cloran (1994) であり、当初は英語における母子会話の分析に用いられた。その後、佐野 (2010a)、佐野・小磯 (2011) により日本語への適用が提案されている。この枠組では、節相当のメッセージが情報を交換するのか品物や行為を交換するのかを規定する「発話機能」、主語要素に対する空間的な距離を表す「中核要素」、副詞や述部に対する時間的な距離を表す「現象定位」を定義し、この組み合わせにより、「脱文脈化指数」と呼ばれる「いま・ここ・わたしからの距離」に相当する観点を割り当てる。脱文脈化指数は、個人的・発話場面に直接かわる表現や話題を脱文脈化の度を低いものとし、汎用的・専門的・一般的・発話場面に直接かわらない表現や話題を脱文脈化の度を高いものとするように割り当てる。これにより、テキストの個別性・一般性・専門性を明らかにする。

日本語のデータとしては田中 (2013) が掲示板データに対するアノテーションを行って検証しているほか、田中・佐野 (2011) が Yahoo! 知恵袋データに対するアノテーションを行っている。

* masayu-a@ninja.ac.jp

しかしながら、日本語のアノテーション基準については、基準策定者が英語と日本語の差異について詳しく認識しておらず、Halliday による選択体系機能理論を日本語に対してどう適用するかについて一般の作業者が作業できるレベルに適切に規定できていない。

また、特殊な訓練を受けたものが作業できて「発話機能」「中核要素」「現象定位」が規定できたとして、その組み合わせによって割り当てられる「脱文脈化指数」は一部の研究者の内省により作られたもので、その妥当性が問われている。

そこで本稿では「脱文脈化指数」の妥当性を検証するために、「発話機能」「中核要素」「現象定位」がアノテーションされた、対のメッセージを被験者に提示して「いま・ここ・わたしからの距離」の近さについて選択させる実験を行った。実験結果に基づき、既存の日本語に対する修辞ユニット分析手法の問題点を示す。

2 節では修辞ユニット分析の詳細について示す。3 節では今回行った妥当性の検証手法と結果について述べる。4 節にまとめと問題点についてどう対処するかについてを示す。

2. 修辞ユニット分析

2.1 分析の単位とメッセージ

修辞ユニット分析の分析対象は「メッセージ」と呼ばれる Halliday の機能文法における階層節に相当する単位とされている。佐野 (2010b) によると日本語における単位については、述語に基づいて定義されている。しかしながら、述語については何ら定義されていない。格要素を持つ形容詞（形容動詞・連体詞を含む）の扱いや、名詞述語の扱いについては何ら触れられておらず、一般のアノテータに必要な情報は定義されていない。埋め込み節についても定義がされていない。関係節内の関係を埋め込み節とみなし、関係節外の間接関係を埋め込み節とみなさないのか、もしくは、両方とも埋め込み節とみなすのかなどについて適切な情報が提供されていない。

この分析の単位であるメッセージは以下の三つに分類される。

- 位置づけ (positioning)

挨拶・定型句・フィラーなど述部を含まない節のみで構成されるメッセージ。これらは修辞ユニット分析において認定の対象外とされる。
- 自由 (free)

独立して時制やムードなどを表すメッセージ。
- 拘束 (bound)

一発話中に二つ以上のメッセージが出現した場合に従属する側のほうを「拘束」とする。従属性については論理・意味・時制の観点から他のメッセージに依存するかどうかを判定する。この拘束はさらに以下の二つに分類する：

 - － 意味的従属

時間・場所・因果関係などの節間の意味を陽に形式として表出するもの
 - － 形式的従属

並列などにより節間の意味（時間）が表出するもの

このうち「位置づけ」については日本語向けに導入されたものである。また、分類の名前づけだが、「拘束：意味的従属」が陽に形式的に節間の意味を表出するものであり、「拘束：形式的従属」が陽に形式的に節間の意味を表出しないもの（並列などにより意味が表出するもの）である点に注意が必要である。

これは基準の定義を行ったものが日本語記述文法による、基本的な節の分類に精通していないことに由来する。英語においては格要素が省略されず、かきまぜもあまりおきないために、埋め込みも含めた節のスコープが明示的に定義できるが、日本語においては適切な基準を立てたうえで整理する必要がある。松本ほか (2017) は、ToriBank の節分類に基づいた『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) (Maekawa et al. 2014) に対する節の意味分類アノテーションについて言及している。このうちのどのレベルをメッセージとみなすのかについて、きちんと検討する必要がある。

2.2 発話機能

発話機能は大きく分けて、命題と提言の二つがある。命題は情報の交換に関するメッセージで、提言は品物や行為の交換に関するメッセージと定義されている。これは、場と時間を共有する会話・対話に対する分類であるが、場と時間を共有しない書き言葉については、基本的には「品物や行為の交換」の規定が難しい。明示的に定義できる品物の交換は書き言葉そのものが書かれている媒体（例：「この手紙に同封しているしおり」）以外、どの範囲まで認めるかを規定する必要がある。田中・浅原 (2017) は Yahoo!知恵袋に対する発話機能のアノテーションの一致率について分析を行っているが、基本的には出現しないと考える「提言」の範囲を規定できていないがために、アノテータでゆれがあることがわかっている。ウェブサイト上でのやりとりについて「交換」とは何であるかを再定義することが求められる。

2.3 中核要素

修辞ユニット分析において「中核要素」はメッセージの中心となる要素のことで、「主語によって表現される」と定義されている。この主語相当の要素が談話状況に出現するか否かにより、空間的な距離感を規定する。分析対象の節が指し示す主語相当の人・事象が空間的にどこに位置するかにより分類を行う。

分類として以下の三つがあり、このうち状況内要素については「参加要素」「非参加要素」に細分類される。

- 状況内要素：メッセージの送り手や受け手がいる場に存在する人・事象
 - － 参加要素：テキストの伝達に参加している人（送り手・受け手）
 - － 非参加要素：テキストの伝達に参加していない人・事象
- 状況外要素：メッセージの送り手や受け手がいる場に存在しない人・事象
- 定言要素：あるカテゴリやクラスに属するメンバーすべてを対象とする要素

田中・浅原 (2016) は Yahoo!知恵袋の中核要素のアノテーション一致率について分析を行っているが、アノテータ間でゆれがあることを報告している。

まず場と時間を共有していない書き言葉において「状況」とは何であるのかについて規定しなくてはならず、テキストの伝達に参加しているか否かについても不透明である。日本語にお

いては、主語相当を分析対象にするのか、主題相当を分析対象にするのかをまず規定する必要がある。さらに格交代をどう扱うかについても定義する必要がある。主語・主題相当の情報が省略されている場合には、作業者が要素を補完する必要がある。

植田ほか (2015) は、BCCWJ に対する述語を厳密に規定したうえで、ガ格相当のゼロ代名詞を外界照応も含めて補完している。

「定言要素」については、名詞句の定性もしくは特定性に関する項目であると考え。冠詞のない日本語において定性・特定性を規定するのは一般の方には難しく、規定も厳密に記述されていない。宮内ほか (2017) は BCCWJ に対して、定性・特定性を含む情報構造アノテーションについて論じているが、書き言葉における状況内外・参加非参加について、情報構造の観点から定義する必要があると考える。

2.4 現象定位

現象定位はメッセージに表現される出来事がメッセージの伝達される時間を基準としていつ起こったのかを示す要素である。元基準は concurrent, prior, future など相対時によって表現されている。細分類も含めて 6 種類の分類が準備されている：

- 現在：メッセージの伝達が行われているときに出来事が起こっている場合
 - － 非習慣的：出来事が一時的・非習慣的なもの
 - － 習慣的：出来事が恒久的・習慣的なもの
- 過去：メッセージの伝達時点より前に出来事が起きたことを示す場合
- 未来：メッセージの伝達時点より後に出来事が起きることを示す場合
 - － 意図的：出来事が意図的なもの
 - － 非意図的：出来事が非意図的なもの
- 仮定：ある条件下においてのみ出来事が起こることを示す場合

このうち「意図的」は「意志的」とするほうがわかりやすい訳語であると考え。

Cloran の修辞ユニット分析は英語を対象としており、時制の一致が見られる節間の関係も含めて、時制が文法的に陽に表出する絶対時制を対象としている。一方、日本語は相対時制による過去-非過去の対立のみ表出する言語であり、Cloran の規定にあるとおりに時制や副詞句によっても適切なタグ付けを設定することは難しい。

書き言葉においては、基準時間を、文書作成日時を現在時とするのか、あるいは、テキストが読まれる時間とするのかについて定義する必要があるが、規定されていない。さらに「仮定」「未来」を想定しているが、出来事の不成立については論じられていない。

小西ほか (2013) は BCCWJ に対して時間表現を実時間に写像する情報を付与することにより正規化する方法を提案し、保田ほか (2013) は時間表現と事象表現もしくは二事象表現間の時間的順序関係をアノテーションすることにより相対時を記号化する方法を提案している。

2.5 修辞機能・脱文脈化指数

上に述べた「発話機能」「中核要素」「現象定位」の組み合わせにより修辞機能が割り当てられ、これにより「いま・ここ・わたしからの距離」を順序尺度化した脱文脈化指数が定義される。図 1 に割り当てを示す。図中 $[n]$ 内の数字 n が脱文脈化指数を表す。

	提言	命題					
		現在 非習慣的・一時的	過去	未来 意図		非意図	仮定
状況内：参加	行動[1]	実況[2]	状況内回想[3]	計画[4]	状況内予想[5]	状況内推測[6]	自己記述[7]
状況内：非参加				状況内予想[5]			観測[8]
状況外		報告[9]	状況外回想[10]	予測[11]	予測[11]	推量[12]	説明[13]
定言				予測[11]			一般化[14]

図1 「発話機能」「中核要素」「現象定位」の組み合わせと修辞機能・脱文脈化指数（日本語）

脱文脈化指数順に並べると以下ようになる。

- [1] 行動 : 品物・サービスの交換に関するメッセージ
- [2] 実況 : 送り手・受け手がいる場に存在する人・事象の現在の行動や状態について表現したメッセージ
- [3] 状況内回想 : 送り手・受け手がいる場に存在する人・事象の過去の出来事についての情報を交換するメッセージ
- [4] 計画 : 送り手・受け手が意図して行おうとしている活動について表現したメッセージ
- [5] 状況内予想 : 意図しないで行われる送り手・受け手の未来の活動、もしくは、送り手・受け手がいる場に存在する送り手・受け手以外の人の未来の活動を表現したメッセージ
- [6] 状況内推測 : 送り手・受け手がいる場に存在する人・事象が、特定の条件下において起こす出来事について表現したメッセージ
- [7] 自己記述 : 送り手・受け手の習慣的な行動や状態について表現したメッセージ
- [8] 観測 : 送り手・受け手がいる場に存在する送り手・受け手以外の人・事象の現在の行動や状態について表現したメッセージ
- [9] 報告 : 送り手・受け手がいる場に存在しない人・事象の一時的・非習慣的な行動や状態を表現したメッセージ
- [10] 状況外回想 : 送り手・受け手がいる場に存在する送り手・受け手以外の人・事象の現在の過去の出来事についての情報を交換するメッセージ
- [11] 予想（予測） : 意図しないで行われる送り手・受け手の未来の活動、もしくは、それ以外の要素による意図的・非意図的な未来の活動を表現したメッセージ
- [12] 推測 : 特定の条件下においてのみ起こる出来事について表現したメッセージ
- [13] 説明 : 送り手・受け手がいる場に存在しない人・事象の習慣的・恒久的な行動や状態を表現したメッセージ
- [14] 一般化 : 特定の要素ではなく、クラス全体について習慣的・恒久的な行動や状態を表現するメッセージ

この修辞機能と脱文脈化指数の割当は、一部の言語学者の内省に基づく恣意的なものである。例えば、先行文献でも図2のように複数のパターンの割り当てが確認できる。このように場当たりに脱文脈化指数が割り当てられており、実証的な研究は進められていない。

Cloran (1994)

	Event Orientation	Proposal	Concurrent		Future		
	Central Entity		non-habitual	habitual	goods/services exchange	information exchange	hypothetical (possible-conditional)
Within material situational setting (MSS)	interactant	Recount[9]	Commentary[2]	Reflection[4]	Action[1]	Plan/Prediction[7]	Conjecture[8]
	other person/object			Observation[3]		Prediction[7]	
Not within MSS	person/object		Report[5]	Account[6]	Prediction[7]		
Class				Generalization[10]			

Cloran (1999)

	Proposal	Proposition				
		concurrent		prior	forecast	
		non-habitual	habitual		non-hypothetical	hypothetical
interactant	action[1]	commentary[2]	reflection[3]	recount[6]	plan[7]	conjecture[10]
co-present person/object			observation[4]		prediction[8]	
absent person/object		report[5]	account[9]			
generalised person/object			generalisation[11]			

佐野・小磯 (2011)

	提言	命題					
		現在		過去	未来		仮定
		非習慣的・一時的	習慣的恒久		意図	非意図	
状況内：参加	行動[1]	実況[2]	自己記述[3]	状況内回想[6a]	計画[7]	予想[8]	推測[10]
状況内：非参加			観測[4]				
状況外		報告[5]	説明[9]	回想[6b]			
定言			一般化[11]				

図2 「発話機能」「中核要素」「現象定位」の組み合わせと修辞機能・脱文脈化指数の割り当てのバリエーション

3. 検証

3.1 検証方法

本稿では、脱文脈化指数の定義を再検討する。一般の方に共有される脱文脈化指数を目指して、「発話機能」「中核要素」「現象定位」が付与されたデータを対象に、被験者実験的に脱文脈化の程度を収集する。対象となるデータは Yahoo! 知恵袋の中カテゴリ「コスメ、美容」の質問と回答 120 サンプルである。脱文脈化指数を説明するために「いま・ここ・わたしからの距離」を判定して答えるという課題を設定する。実験協力者は Yahoo! クラウドソーシングのアカウントを持つ 20 歳以上の女性（異なり 141 人）⁽¹⁾とする。実験協力者は左右に並べた二つのテキスト（Yahoo! 知恵袋の 2 サンプル）と評価対象のメッセージを確認し、左右どちらのメッセージが「いま・ここ・わたしからの距離」に近いかを判定する。図 3 に実験協力者に呈示した例文対を示す。

左の例は命題であり、中核要素の対象は省略されている「(化粧の濃淡は)」を選択し、「状況外」とタグ付けされている。現象定位の対象である述語相当として「好みなんでしょうか?」が選択され、「現在; 習慣的・恒久」とタグ付けされている。結果「13 説明」となる。

右の例は命題であり、中核要素の対象は省略された「私は」とし、「状況内：参加」とタグ付けされている。現象定位の対象である述語は「コンプレックスです。」が選択され、「現在; 習慣的・恒久」とタグ付けされている。結果「07 自己記述」となる。

(1) 丁寧な作業員を選択するために、チェック設問として厳しめの課題を設定した結果、763 人（異なり）の方が落選した。

図3 Yahoo!クラウドソーシングで示した例文対

A OC09_00002_Q_003	B OC09_00019_Q_005
<p>彼氏に、「化粧してるのかわからない」と言われたので、濃い目にしたら、満足したみたいなんですけど、 普通男性って薄い化粧の方が好きなのかと思ってきました。 こういうのはやはり個人の好みなんですか？ それとも彼は、少し変わってるのでしょうか？ 人によって好みが変わると思います。 一般的には、ナチュラルメイクの方が好印象だと思うのですが・・・・・・・・</p>	<p>私は中一です。 ニキビを潰してしまう、クセがあるのですが、 どうしたら良いでしょうか？ 気がついたら、引っかいていて、潰れて跡が残ってしまって・・・ とてもこの顔がコンプレックスです。</p>

これらを総合して「いま・ここ・わたしからの距離」に近いのは右になる。このデータに対しては24件の有効回答が得られ、左が近いとしたものが11件、右が近いとしたものが13件であった。

このようなデータに基づき、次節に述べる統計モデリングを行う。

3.2 モデリング

統計処理は Bradley Terry モデルに基づく。Bradley Terry モデルは一対比較データに基づいてオッズ比をモデル化することにより、優劣を線形順序にモデル化する手法である。要素 n 個要素 i と要素 j を一対比較した場合に、要素 i と要素 j に勝つ ($i \succ j$ とあらわす) 確率を $P_{i \succ j}$ とする

$$P_{i \succ j} = \frac{\pi_i}{\pi_i + \pi_j}$$

となる π_i を導入する。ここで $\lambda_i = \log \pi_i$ となる係数を導入すると以下のようになる：

$$\text{logit}(P_{i \succ j}) = \lambda_i - \lambda_j$$

すべての一対比較が独立であると仮定して、この係数 $\{\lambda_i\} (i = 1 \dots n)$ を一般化線形モデルに基づく最尤法 (切片 (定数項) のないロジスティック回帰) によって推定する。

分析は「中核要素」の評価・「現象定位」の評価・「脱文脈化指数」の評価の三つを行った。分析においては人手によるラベルが異なるもののみを用いた。ランダムに一対比較をサンプリ

ングした結果、「脱文脈化指数」についてはラベルが出現しなかったものもあるが、出現したラベルについてのみ分析を行う。

3.3 結果

表1 中核要素のモデリング結果：Bradley Terry モデルによる係数

状況内：参加	状況外	状況内：非参加	定言
-0.1939	0.0000	0.1083	0.3169

表1に中核要素のモデリング結果を示す。係数の大小が実験協力者が答えた「いま・ここ・わたしからの距離」の相対的な大小関係を表す。負の値であっても小さいほうが距離が近いことを表す。実験協力者は状況内：参加<状況外<状況内：非参加<定言の順に「いま・ここ・わたしからの距離」の順序関係を定義している。特に状況内要素については参加要素と非参加要素を区別している傾向がみられた。

表2 現象定位のモデリング結果：Bradley Terry モデルによる係数

未来 非意図的	現在 非習慣的・一時的	過去	未来 意図的	現在 習慣的・恒久
-0.5436	-0.4199	-0.2502	-0.1671	0.0000

表2に現象定位のモデリング結果を示す。実験協力者は未来：非意図的<現在：非習慣的・一時的<過去<未来：意図的<現在：習慣的・恒久の順に「いま・ここ・わたしからの距離」の順序関係を定義している。

表3 脱文脈化指数のモデリング結果：Bradley Terry モデルによる係数

2 実況 現在 非習慣的・一時的 状況内 {参加, 非参加}	5 状況内予想 未来 {意図*, 非意図}	9 報告 現在 非習慣的・一時的 状況外	3 状況内回想 過去 状況内 {参加, 非参加}	4 計画 未来 意図 状況内 参加
0.0000	0.0447	0.0825	0.30823	0.4212
7 自己記述 現在 習慣的・恒久 状況内 参加	13 説明 現在 習慣的・恒久 状況外	10 状況外回想 過去 {状況外・定言}	8 観測 現在 習慣的・恒久 状況内 非参加	14 一般化 現在 習慣的・恒久 定言
0.5647	0.5883	0.7137	0.7428	1.0756

表3に脱文脈化指数のモデリング結果を示す。実験協力者は2実況<5状況内予想<9報告<3状況内回想<4計画<7自己記述<13説明<10状況外回想<8観測<14一般化の順に「いま・ここ・わたしからの距離」の順序関係を定義している。

3.4 考察

まず「中核要素」について考察する。佐野 (2010b) は、状況内：参加<状況内：非参加<状況外<定言の順を提案しているが、被験者実験的に得られた結果は、状況内：参加<状況外要素<状況内：非参加<定言の順であった。日本語母語話者は状況内：参加と状況内：非参加を明示的に区別したうえで、状況内：非参加を状況外よりも遠いものとして扱う傾向がみられた。

次に「現象定位」について考察する。佐野 (2010b) は、現在：非習慣的・一時的<過去<未来：意図的<未来：非意図的<仮定<現在：習慣的・恒久の順を提案しているが、被験者実験的に得られた結果は、未来：非意図的<現在：非習慣的・一時的<過去<未来：意図的<現在：習慣的・恒久の順であった。日本語は過去-非過去の対立のみが陽に表出しない言語ではあるが、「未来：非意図的」をより近いものとして扱う傾向がみられた。

最後に組み合わせより得られる佐野 (2010b) に基づく「脱文脈化指数」の順序は、スピーアマンの順位相関係数が 0.80 と高い相関を持っているが一致しているとまでは言えない。

以上の結果から、佐野 (2010b) の問題点として空間と時間の捉え方の恣意性があげられる。

書き言葉において、状況内か状況外か、さらに参加しているかしていないかについての明確な指針がないために「中核要素」において状況内：非参加と状況外間の判別が不定になっているのではないかと考える。それ以前に対象が主語相当か主題相当かについてきちんと定義されておらず、中核要素のアノテーション側の問題があるのではないかと考える。

「現象定位」においては、アノテーション基準が日本語の時制をどのように扱うか、明確化できていないために適切に作業できていない可能性がある。また、被験者実験側で、未来：非意図的が現在：非習慣的・一時的よりもより近いものとして、とらえる傾向にあることも興味深い。

「脱文脈化指数」については、相関係数が高いながらも、適切な割り当てがされていないように見える。中核要素において、被験者実験側では状況内：参加と状況内：非参加で差があることが確認されている。この差が「脱文脈化指数」の 2 実況・3 状況内回想・5 状況内予想においては捨てられており、指標に反映されていない。

4. おわりに

本稿では修辞ユニット分析における脱文脈化指数の割当についての妥当性を被験者実験により検証を行った。佐野 (2010b) の割当方式が、順位相関係数では 0.80 と高い一方、必ずしも一般の被験者の感覚と一致しているわけではなく、中核要素や現象定位においては順序が一致しない傾向があることがわかった。

問題点として、Cloran (1994) が提案するような「発話機能」「中核要素」「現象定位」が現代日本語書き言葉に対してタグ付けられるのかという観点と、「発話機能」「中核要素」「現象定位」から「脱文脈化指数」を構造主義的に決定できるのかという 2 点があげられる。

前者については、時制や主語・主題の基準があいまいであり、特殊な訓練を受けたものであっても安定してタグ付けするのは難しい。日本語の特性に合わせた別の基準を再構築する必要がある。後者については、タグ付けの問題がなかったとしても、単純な組み合わせによる脱

文脈化指数の割り当てが一般人の感覚と乖離している。

問題点の解決として、「脱文脈化指数」そのものを被験者実験的に付与することと、「発話機能」「中核要素」「現象定位」について日本語の特性を知ったうえでタグ付け可能な人を育成することとどちらが低いコストであるのかを考える必要がある。

今後、今回の一対比較をテキストデータに付与することで、脱文脈化傾向の指数化を試みる。このデータの蓄積から、どのような特徴量が脱文脈化傾向を表出するのかをデータを統計処理することにより帰納的に求めることを試みる。

謝 辞

本研究は JSPS 科研費 JP15K02535 の助成を受けたものです。本研究の一部はコーパス開発センターの共同研究プロジェクトによるものです。

文 献

Carmel Cloran (1994). *Rhetorical Units and Decontextualisation: an Enquiry into some Relations of Context, Meaning and grammar*. Vol. 6. *Monographs in systemic linguistics*.: University of Nottingham.

佐野大樹 (2010a). 「選択体系機能言語理論を基底とする特定目的のための作文指導方法について—修辞ユニットの概念から見たテキストの専門性—」 専門日本語教育研究, 12, pp. 19–26.

佐野大樹・小磯花絵 (2011). 「現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証—「書き言葉らしさ・話し言葉らしさ」と脱文脈化言語・文脈化言語の関係—」 機能言語学研究, 6, pp. 59–82.

田中弥生 (2013). 「評価の高低によるクチコミサイト「アットコスメ」における談話構造の特徴—修辞ユニット分析を用いて—」 神奈川大学 言語研究, 35, pp. 1–23.

田中弥生・佐野大樹 (2011). 「Yahoo!知恵袋における質問の修辞ユニット分析—脱文脈化-文脈化の程度による分類—」 電子情報通信学会技術研究報告 (第2回集合知シンポジウム) 110 巻., 電子情報通信学会.

佐野大樹 (2010b). 『日本語における修辞ユニット分析の方法と手順 ver.0.1.1—選択体系機能言語理論 (システムック理論) における談話分析— (修辞機能編)』.

松本里美・浅原正幸・有田節子 (2017). 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する節の意味分類情報アノテーション—基準策定, 仕様書作成の必要性について—」 言語資源活用ワークショップ 2016 発表論文集, pp. 336–346.

Kikuo Maekawa, Makoto Yamazaki, Toshinobu Ogiso, Takehiko Maruyama, Hideki Ogura, Wakako Kashino, Hanae Koiso, Masaya Yamaguchi, Makiro Tanaka, and Yasuharu Den (2014). “Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese.” *Language Resources and Evaluation*, 48, pp. 345–371.

田中弥生・浅原正幸 (2017). 「Yahoo! 知恵袋における修辞ユニット分析の発話機能認定に関する諸問題」 言語処理学会第 23 回年次大会発表論文集, pp. 831–834.

田中弥生・浅原正幸 (2016). 「Yahoo! 知恵袋における修辞ユニット分析の中核要素認定に関

- する諸問題」 言語処理学会第22回年次大会発表論文集, pp. 881–884.
- 植田禎子・飯田龍・浅原正幸・松本裕治・徳永健伸 (2015). 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する述語項構造・共参照関係アノテーション」 第8回コーパス日本語学ワークショップ予稿集, pp. 205–214.
- 宮内拓也・浅原正幸・中川奈津子・加藤祥 (2017). 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』への情報構造アノテーションの構築」 言語処理学会第23回年次大会発表論文集, pp. 402–405.
- 小西光・浅原正幸・前川喜久雄 (2013). 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間情報アノテーション」 自然言語処理, 20:2, pp. 201–222.
- 保田祥・小西光・浅原正幸・今田水穂・前川喜久雄 (2013). 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間情報表現・事象表現間の時間的順序関係アノテーション」 自然言語処理, 20:5, pp. 657–681.
- Carmel Cloran (1999). *Pedagogy and the Shaping of Consciousness.*, Chap.Contexts for learning pp. 31–65.: Bloomsbury Academic.

関連 URL

- コーパス検索アプリケーション『中納言』 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>
- 『国語研日本語ウェブコーパス』検索系『梵天』 <http://bonten.ninjal.ac.jp/>